論文の内容の要旨

論文題目　　国民統合と歴史学――スターリン期ソ連における『国民史』論争――

氏　　名　　立石洋子

本稿は、スターリン期のソ連における国民史像の形成とその変遷を、党・政府指導部の政策と歴史家の議論から検討する。歴史学と政治が密接な関係を持つことは広く知られているが、特に自国史像の解釈は現在も多くの国で政治的論争の対象となっている。これは自国史像がその国家内の個人や集団、また国家自体のアイデンティティと密接に結びつくためであり、ソ連にとってもそれは例外ではなかった。広大なロシア帝国の領土を受け継いだソ連は、100 を超える諸民族からなる多民族国家として誕生した。ソ連初期のマルクス主義史学は、ロシア帝国による階級的支配と植民地支配を激しく批判し、皇帝や軍人の歴史に代わって革命運動や労働者の歴史、そしてこれまで歴史研究の対象とみなされなかった非ロシア諸民族の歴史を描かねばならないと考えた。そのため初期のマルクス主義歴史家は、植民地支配を含む革命前ロシアの否定的側面を強調し、それによってソヴェト政権の理念的正統性を示そうとした。

しかし 1920 年代後半には世界革命への期待が非現実的と見なされるようになり、1930 年代には事実上、他国と同じような「国民国家」として国家を成立させることが課題となった。また革命と内戦、それに続く農業集団化と大規模な飢饉、急速な工業化は、犯罪や

浮浪児の増加といった社会的混乱を引き起こしていた。これに加えてナチ・ドイツをはじめとする同時代の諸外国の動向は、それとの対抗の必要性を党・政治指導部に意識させ、全国民の統合をより積極的に推進すべきだという見解が次第に優位を占めた。こうした国内外の情勢から、1930 年代半ばにはソ連初期に否定された「家族」や「祖国」といった伝統的価値観への注目が高まった。主要新聞・雑誌は「ソヴェト愛国主義」の重要性を訴え始め、歴史家や歴史教師の間では、歴史学はナチ・ドイツの反ソ連的宣伝と対抗し、愛国主義の育成の手段たるべきだという主張が活発化した。

このなかで党・政府指導部は歴史研究・教育に対する関心を強め、国民統合の基盤となりうる「国民史」を要求し始めた。1937 年に出版された初の初等教育用ソ連史教科書は、ロシア政府による階級的支配や植民地支配の否定的描写を維持しながらも、国家統合と強化、諸外国との戦いの歴史に限定してロシア史を再評価した。ウクライナとグルジアのロシアへの編入については、両民族がロシアと同じ宗教を持ち、また他国による併合の可能性があったという理由で、「より小さな悪」として限定的に再評価した。また非ロシア諸民族史の描写が重視され、ロシアに対する反乱は民族解放闘争として肯定的に描かれた。つまり 1930 年代半ばには、ロシア人だけでなく非ロシア人を歴史の主体とする国民史の作成が目指されたといえる。つまり、階級と民族という二つの概念を用いて「ソヴェト愛国主義」の理念を浸透させ、国民を統合することが歴史学と歴史教育の課題と見なされたのであった。

初等教育用ソ連史教科書の出版後、中等・高等教育機関用教科書の作成や、個別テーマの研究を通じて、ソ連史研究の対象は深化・拡大していった。このなかで歴史家は、階級と民族、国民という三つの概念を、個々の史実や歴史上の人物の描写のなかで組み合わせ、調和させようとした。ソ連初期の歴史学は、経済的要素が歴史を動かすと考えたが、1930 年代半ば以降には、愛国主義の象徴として国民に訴え得る要素が必要だとみなされ、各民族の歴史上の人物の役割が再評価され始めた。ロシア史上の君主のうち、イワン雷帝やピョートル大帝は国家統合への貢献を理由に再評価され、非ロシア諸民族史上の人物のなかでは、特に 19 世紀北カフカースの対ロシア反乱を率いたシャミーリが、民族解放運動の象徴として称賛された。ウクライナでは、ロシアとの統合を率いたコサック幹部のフメリニツキーを、ポーランドからウクライナを解放し、ロシアと統合させた英雄とする描写が広まり始めた。このことからも分かるように、この時点では対ロシア反乱を率いた人物も、ロシアとの統合を率いた人物も同様に、各民族の英雄として肯定的に評価された。しかし、

歴史家のなかには、ロシアの領土拡大をより肯定的に評価する見解もあり、論争が続いた。

こうした状況に変化を与える契機となったのは、1941 年 6 月に勃発した独ソ戦であった。ドイツ軍はソ連からの非ロシア諸民族の分離を目的として、特に北カフカースでコルホーズの廃止や宗教活動の自由化などの政策を実施した。これは地域住民に歓迎され、ドイツ軍が同地域から追放された後にも、赤軍に対して戦闘を続ける集団が現れた。ドイツ外務省は、ソ連から亡命した非ロシア人の団体やソ連外のパン・チュルク主義運動、ソ連内の非ロシア人の軍事捕虜の利用を画策した。独ソ戦期にドイツ外務省に招かれた亡命者団体のなかには、19 世紀北カフカースで対ロシア反乱を率いたシャミーリの孫にあたる人物も含まれていた。これに対してソ連当局は、ドイツの占領下に置かれた地域で宣伝活動を活発化させただけでなく、対独協力者を多数輩出したとみなした民族を強制移住させるという手段を採った。歴史家の一部からは、シャミーリの反乱を初めとする対ロシア反乱の称賛に対する批判が表明され、北カフカースの不安定化の責任は歴史学にあるという発言も聞かれた。

独ソ戦の終結後、冷戦という新たな国際的緊張が次第に醸成されるなかで、西欧に対する「跪拝」との戦いと、ロシア人を中心とするソ連の諸民族の団結が公的イデオロギーの中心となると、党・政府の出版物では、「より小さな悪」の理論がウクライナ、グルジア以外の地域の併合にも適用され始め、非ロシア諸民族のロシアに対する反乱を称賛することは次第に困難となっていった。冷戦の緊張が頂点に達した 1950 年には、党の理論誌や主要新聞紙上に、シャミーリの反乱や 19 世紀カザフスタンにおけるケネサルの反乱を、反動的反乱とする論文が掲載された。これ以降、この二つの反乱を称賛してきた歴史家は自己批判を余儀なくされ、その一部は免職され、逮捕された。1950 年以降にも、全ての非ロシア諸民族の反乱の進歩性が否定されたわけではなかった。しかし、ロシアへの併合の肯定的側面が前面に出され、ほぼすべての民族のロシアへの編入を「より小さな悪」とする主張が支配的となり、この新たな国民史像はスターリンが死亡する 1953 年まで維持された。

ソ連の国民史像は、国際的緊張に対する対応として発展した点で他国と類似性を持つと言える。しかしここには、階級闘争史観や帝国主義批判というソ連の歴史学に固有の特徴も存在した。1930 年代半ばから独ソ戦までのソ連の自国史研究・教育の大きな特徴は、階級闘争史観を基盤としながら、ロシアを含む各民族の伝統を再評価し、さらに非ロシア人の対ロシア闘争を称賛したこと、つまり階級と民族という二つの要素を利用して国民史像

を構築しようと試みた点にあった。しかし国民史像の中心に置かれたのは最大民族であり、諸民族を統合したロシアの歴史であった。ロシアを中心としながら、同時に非ロシア諸民族の伝統を、対ロシア反乱も含めて称賛するという課題を、個々の史実に適用することは容易ではなかった。このことは、全世界の勤労者の祖国を名乗り、また多民族国家という自己認識を持ったソ連で、全国民が共有するアイデンティティの形成がいかに困難であったかを示していた。

国民史像の中心的要素の一つとなった階級概念に関しては、1930 年代半ばに歴史上の人物の役割が再評価され初め、ロシア君主については国家統合と強化への貢献のみを肯定的に評価し、階級的支配や植民地支配については否定的に捉えるという描写が定着した。しかし対ロシア反乱を率いた非ロシア諸民族の指導者の評価については、独ソ戦後まで歴史家の議論が続いた。次に国民史像のもう一つの中心的要素となった民族の概念については、1930 年代半ばから独ソ戦期には、各民族の伝統の称揚が国民的アイデンティティの形成に寄与するという見解が、党・政府と歴史家の間である程度共有されていた。特に独ソ戦期には、非ロシア諸民族を戦争に動員するために、各民族の歴史を、対ロシア闘争を含めて英雄的に描写することが歴史学の最重要課題とみなされた。しかし一部の歴史家は、帝政ロシア国家の強化を理由に領土拡大を正当化し、さらに非ロシア諸民族の対ロシア反乱を称賛すべきでないと主張した。このような主張は独ソ戦初期の段階では、歴史家の間で広く共有されることはなかった。しかし、ドイツのプロパガンダの影響に対する危惧や対独協力者の出現は、各民族のアイデンティティにおけるエスニックな要素が、ソ連からの自立化や、諸外国との絆を介して、ソ連と敵対的な外国の手先となる可能性を与えるのではないかという警戒を政治指導部に与えた。その後冷戦の緊張が頂点に達するなかで党・政府指導部は、ロシアに対する反乱を肯定的に描写するこれまでの国民史像を維持することは不可能だと判断し、ロシアの領土拡大をより積極的に肯定する歴史家の説を公式見解として取り入れたのだと考えられる。